

# CNALレポート・ジャパン

Conferencing industry News report, research & Analysis - CNA Report Japan

創刊：1999年12月

発行日：毎月15日・月末

取材・編集・発行：橋本啓介

テレビ会議・ウェブ会議・電話会議システム専門 定期レポート

2011年12月ラドビジョンインタビュー

編集:[editor@cnar.jp](mailto:editor@cnar.jp) 広告:[pr@cnar.jp](mailto:pr@cnar.jp) 読者登録:<http://cnar.jp>

Copyright 2011 CNA Report Japan. All rights reserved.

## インタビュー特集

ラドビジョンジャパン インタビュー



テクノロジー事業本部長

加藤 昭彦 氏

橋本：加藤様は、今年の7月1日からラドビジョンに入社されたのですね。

加藤氏：その通りです。前職は、IBMに1988年からラドビジョンに入社前まで勤めておりました。ご存じの通り、ラドビジョンとIBMはユニファイドコミュニケーションで協業しております。私は2003年からLotus事業部に所属しております、実はIBMを辞める3年ぐらい前からラドビジョンとの仕事にかかわっておりました。もちろん、ラドビジョンジャパン社長である西村耕三ともIBM時代からよく知っておりました。ラドビジョンとユニファイドコミュニケーションについてお互い議論を積み重

ねてきましたが、私自身もビジュアルコミュニケーションの可能性にだんだんと魅了されました。そういった折りに、ビジネスに参加する機会に恵まれ、また前職での区切りも着いたので、ラドビジョンに入社するに至ったわけです。

橋本：IBMではエンジニア畑を歩まれていますね。

加藤氏：そうですね。1988年に入社してから、社内系オンラインシステムの開発を皮切りに、リレーショナルデータベースの開発に関わり、その後IBM社内のOA業務改革の一環としてグループウェア刷新プロジェクトリーダーやグローバルのCIOミッションのチームの一員として、IBM社内情報システムやグローバルインフラの再構築に携わりました。その後、西日本担当(名古屋勤務)のプリセールスエンジニアを経て、ユニファイドコミュニケーションにも関係してくる、Lotus事業部に2003年より担当していました。その間製品プロモーションやセールス、またユニファイドコミュニケーション製品営業責任者(日本)も経験しています。出身大学は名城大学で機械工学を専攻していました。

橋本：ラドビジョンとはどういった会社なのかご紹介ください。

加藤氏：ラドビジョンは、IPや3G、そして次世代のIMS/LTEネットワーク上で双方向のビジュアルコミュニケーションを可能にする技術、製品、ソリューションを提供するリーディングプロバイダーです。

当社は、イスラエルの会社で、設立はインターネット黎明期の1992年。IP上のコミュニケーション(VoIP)を実現する技術を開発する目的の基に設立され、当社は来年で20周年を迎えますが、V2oIP(Voice, Video over IP)技術実装の

パイオニアで、シグナリングとメディア(コーデック)に強みを持ちます。標準化団体や相互接続団体への積極的な貢献とともに当社の開発ツールは、メジャーな V2oIP 開発者に利用されているデファクトスタンダードです。開発者のための最初の選択肢になることを目指しています。

当社全世界の従業員数は、約 440 名(そのうち7割がエンジニア)。世界 4ヶ所の開発拠点をもち、営業・サポート拠点は、世界 17ヶ所に及ぶグローバル企業です。

橋本：業績はどのような状況でしょうか。

加藤氏：当社は、VoIP 技術ソリューションをいち早く市場に投入し市場を牽引してきました。お陰様でインターネットの拡大とともに業績も順調に拡大。2010 年度の売上高は、9,500 万ドル、また貸借対照表上 1 億 2,600 万ドルの現金資産を保有しており無負債。財務上健全な経営を行っています。一方、投資の部分については、相互運用性や標準化の支援に継続的に数百億ドルの投資を行っており、豊富な数の知的財産や特許を保有しています。ちなみに 2000 年 3 月には、NASDAQ 上場(RVSN)を実現しています。

橋本：ラドビジョンは、製品部門と技術ライセンスの 2つの部門があります。

加藤氏：その通りです。ラドビジョンには、私が所属している技術ライセンスを行うテクノロジービジネス事業部門(TBU)と、ビデオビジネス事業部門(VBU)があります。

まずテクノロジービジネス事業(TBU)は、映像や音声を IP ネットワーク上や 3G、IMS で通信するクライアントやサーバを設計・開発する企業向けの実装技術、たとえば、SDK やフレームワークなどの開発ツールを提供する部門です。今日のインタビューは TBU 部門についてですので、この後順番に詳しくお話させていただきます。

またもうひとつのビデオビジネス事業(VBU)は、エンタープライズ市場向けに、インフラ機器から、管理ソフトウェア、端末

機器までエンドツーエンドでビデオ・音声会議ソリューションを提供する部門です。具体的には「SCOPIA」製品の販売を行っています。

両部門は、補完しあう関係にあります。なぜなら、TBU 部門で提供している開発ツールを利用してそれをもとに SCOPIA 製品を開発・製造しているからです。また逆に VBU で得られるお客様からのフィードバックなどをもとに TBU で提供している開発ツールの向上を図れます。

橋本：TBU からすると VBU はある意味お客様でもあるような関係に似ていますね。

加藤氏：そういった面もありますね。あとそうですね、私たちの競合となっている他のテレビ会議メーカーの多くも当社のお客様でもあります。競合メーカーのテレビ会議製品が売れば売れるほど当社にとっても売上に繋がってくる面があります。当社の開発ツールを利用いただいているからです。

## 包括的なソリューションポートフォリオ

あなたが開発で必要とするものすべてが見つかります



橋本：VoIP 製品開発ではこういったニーズがあるのでしょうか。

加藤氏：VoIP 製品開発者が求めている技術は、シグナリング、メディア(コーデック)、リアルタイム、システムインテグレーション、相互運用性、エンドツーエンドソリューションです。当社の開発者向けの各種ツールは、包括的で開発者が必要とするもの全てを見つけていただけると確信しております。世界ですでに 700 社を越えるお客様に採用されてお

り、SIP 用の開発ツールについては、300 社以上に採用され、60%の市場シェアを持っています。

橋本：ラドビジョンの開発者向けツールを活用することでどういったメリットがあるのでしょうか。

加藤氏：大きく言って、2つあります。まずひとつ目は、開発期間やコストの削減が可能ということ。またもうひとつは、それによる市場への製品投入までの時間を短縮できるということです。

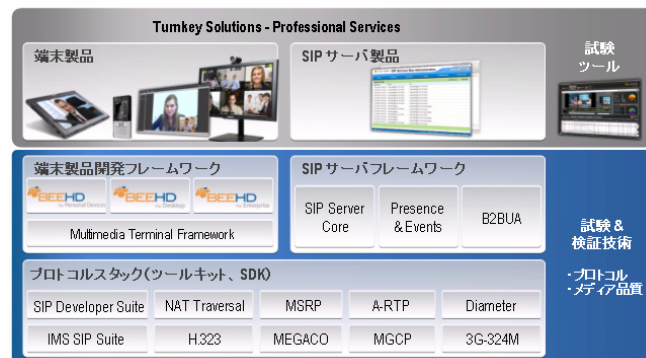
特に V<sup>2</sup>oIP の製品開発においては、複雑なコーデック開発などがあり、開発期間に時間がかかるものです。加えて、コーデック開発においては、相互接続性が重要になりますので、その接続検証にも時間がかかります。

当社の開発ツールは、すべての VoIP 開発に必要な共通なツールセットを提供しているとともに、クイックスタートプログラム、実用的なサンプルコード、API、すでに検証されている相互接続性などとても柔軟性が高い。通信エンジンの部分については当社の開発ツールを活用し、API でお客様のアプリケーションと連結させ、必要な調整をおこなっていただけるだけでオリジナルな V<sup>2</sup>oIP アプリケーションが短期間で開発可能です。加えて検証の手間も大幅に減らせます。結果、トータルな開発コストの低減が可能ですし、市場への製品投入までの時間も短縮できます。

橋本：具体的にはどういった開発者向けツールを提供されているのでしょうか。

加藤氏：まず TBU 部門では、端末やサーバなどの開発用のプロダクトとテストツール、そしてそれらを支援するプロフェッショナルサービスを提供しています。

#### RADVISIONの 開発支援製品バリエーション End to Endの製品ポートフォリオ



橋本：まずは端末やサーバなどの開発用のプロダクトとテストツールについてご説明いただけますか。

加藤氏：提供している開発者向けソリューションは、大きく分けて 3 つあります。ひとつ目は、端末製品開発用フレームワーク「BEEHD」、ふたつ目は、SIP サーバ開発用の「SIP サーバフレームワーク」、そして三つ目は、プロトコルスタック(ツールキット、SDK)になります。またこれらに加えてビデオ品質のモニタリングや試験を行うためのツール各種があります。

#### BEEHD 製品ファミリー

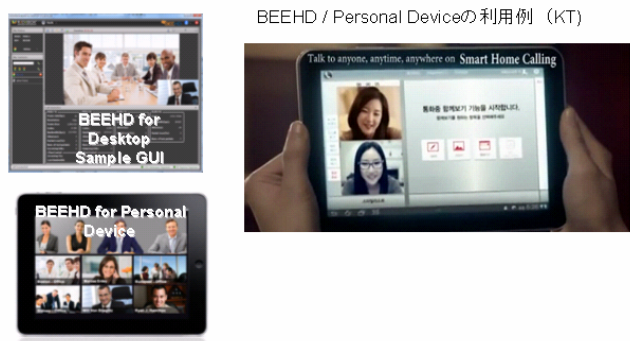


BEEHD は、端末開発の切り札として当社が自信を持って提供している開発用ツールですが、デバイスやそのチップセットによって 3 種類のツールを提供しています。

それらは、Intel ベースの Windows アプリケーション開発向けの「BEEHD for Desktop」、Android 版携帯端末やタブレット向けの「BEEHD for Personal Devices」、そして

Embedded Linux 版で Texas Instruments 社の DaVinci チップの専用端末向けの「BEEHD for Enterprise」になります。今後 Apple 社の iOS 対応向けも 2012 年の第1四半期の提供を予定しています。BEEHD をさらに充実したソリューションとしていきます。

## BEEHD スクリーン



橋本：BEEHD の採用実績などはいかがでしょう。

加藤氏：BEEHD は発売されて 2 年が立ち、開発会社において導入が進んでいますが、アジア太平洋地域での最近の大きな開発事例としては、サムスン(Samsung)の Android ベースのタブレット Galaxy TAB2向けのテレビ電話があります。このテレビ電話は、コリアテレコムの方の双方向のビデオコールサービスで採用されています。当社の技術が韓国を代表する通信会社のサービスで活用されているひとつの例となります。ちなみに、YouTube でそのCMも見られますので、よろしければご覧ください。(2011 年 12 月 15 日現在)。

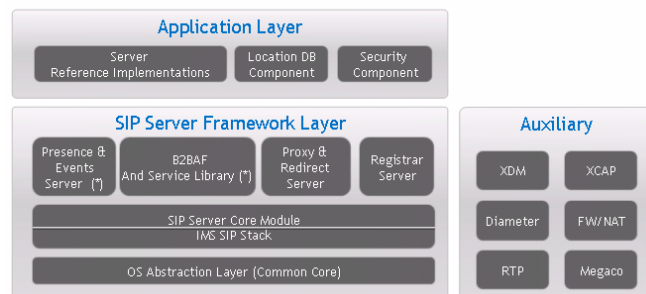
橋本：SIP サーバフレームワークについてお願いします。

加藤氏：SIP サーバフレームワークでは、「SIP Server Core」、「Presence & Events」、「B2BUA」を提供しています。

基本的に SIP 環境での V2oIP アプリケーション開発には、サーバと端末開発のふたつの開発が基本的に必要なになりますが、この SIP サーバフレームワークに加え、さきほどの端末

開発用の BEEHD を用いることでできます。

## SIP サーバソリューション



橋本：プロトコルスタックについてお願いします。

加藤氏：プロトコルスタックでは、「SIP Developer Suite」、「NAT Traversal」、「MSRP」、「A-RTP」、「Diameter」、「IMS SIP Suite」、「H.323」、「MEGACO」、「MGCP」、「3G-324M」を提供しています。NATトラバーサルや H.323、IMS 環境向けの各種プロトコルスタックを用意しています。

当社の開発者向けソリューションについては、インターネット初期の 90 年代からこのプロトコルスタックの提供を行っております。昨今の端末開発ニーズの増大にともなって、ツール自体においても包括的なエンドツーエンドのソリューションが要望され、当社として BEEHD や SIP サーバフレームワークを提供するに至っています。

当社の提供するラインナップから開発者が必要とするものすべてが見つかるはずで

橋本：開発においては試験ツールも重要ですね。

加藤氏：もちろんそうです。開発したアプリケーションにバグはないか、正しく動作するかを確認するプロセスを行うことは開発者としては当然ですが、当社の開発者向けソリューションは、そういったニーズに対応する V2oIP テストおよびビデオ品質分析ソリューションを 4 つ用意しています。

IP ネットワーク上で、音声・ビデオの送受信の品質向上

を行うためのSDKである「VQSDK」の他、企業のIPネットワーク上の、ビデオ送受信の監視、評価・分析、問題解決、効果予測のためのツール「VQMonitoring」、そのVQMonitoringの分析機能を拡張した多角的分析ツール「eVident」、そしてさらには、IMS・SIP・H.323・3G-324M・V2oIP のテストスイート「ProLab」を提供しています。

### VoIP テストおよびビデオ品質分析ソリューション



橋本：試験ツールの特長は。

加藤氏：ビデオ品質の評価は、フレームやピクセル単位で分析できるようになっていますので、非常に高度なレベルで開発中のアプリケーションの調整が可能です。

このソリューションは、基本的には開発者向けではありませんが、日本国内では、インターネットサービスプロバイダーのネットワーク検証でも採用いただいております。

橋本：V<sup>2</sup>oIP 開発に慣れていない、あるいはしっかりとサポートが必要な場合はいかがでしょうか。

加藤氏：そういったニーズに対して、完全なバックアップをするための充実したサポートサービスを「グローバル プロフェッショナル サービス」として提供しています。このプロフェッショナルサービスでは、V<sup>2</sup>oIP アプリケーションを開発するプロセスの設計デザインから、開発中でのさまざまな支援、そして接続検証、市場投入まで一貫したサポートを二人三脚のように

対応させていただきます。加えて、開発のアウトソーシングも可能です。1992年設立以来積み上げられたノウハウと経験を開発者の皆様にご提供させていただきます。

グローバル プロフェッショナル サービス



橋本：TBU 事業のプロモーションとして取り組んでいらっしゃるそうそうですね。

加藤氏：はい。インターネットを活用して、当社のウェブサイトからの情報発信の他、開発者がいろいろな情報交換が行える「Developer Community」、ニュースレターの発行、ブログ掲載など TBU 事業についての理解を深めてもらう取り組みを展開しています。また、ツイッターやフェイスブックでもタイムリーな情報を配信しております。特に、フェイスブックについてはラドビジョン本社および、ラドビジョンジャパンとして日本語での情報提供も行っていますので、アカウントをお持ちの方は是非アクセスいただければと思います。なお、自社主催やパートナー様との共催セミナーあるいは日経B P主催の ITpro EXPO 2011 などの展示会も積極的に実施しています。

橋本：今後の取り組みなどについても含めて教えてください。

加藤氏：こういった取り組みを積極的に展開することで、ラ

ドビジョンの認知や理解を広めていきたいと考えています。その中で、TBUについては、今年(2011年)と来年にかけてとりわけ BEEHD のプロモーションを図っていくことを考えています。そのために、新たな販売代理店様や開発ベンダー様の発掘、あるいは、キャリア様やサービス提供事業者(サービスプロバイダー)様などのパートナーシップも積極的に増やしていきたいと思っています。

今後、ビジュアルコミュニケーションは、モバイル環境の充実によって会議室の外でのアプリケーションが増えてくると見えています。たとえば、双方向会議以外にも、監視システムや救急車にテレビ会議を搭載した事例なども海外では増えてきています。また、コンシューマーにおけるビデオチャットの可能性も広がっていますので、これからの関連のビジネスは今後非常に面白くなっていくと考えています。

そういった期待感の高いビジュアルコミュニケーション市場で、当社はそういったビジネス機会を取り込んでいける技術を提供することができます。

橋本：ありがとうございました。



RADVISION Japan 株式会社  
 〒110-0016 東京都台東区台東 1-32-8 清鷹ビル 3 階  
 電話番号: 03-5816-8950  
 FAX 番号: 03-5816-8955  
 Email: [infoJAPAN@radvision.com](mailto:infoJAPAN@radvision.com)  
<http://www.radvision.jp/>